

(2) 授業実践

授業実践②

国際学級 第6学年国語科「お話をよく聞いて考えよう」

日 時 平成26年1月
対 象 6年ゆり組 名
授業者 岩浅 健介

1. 単元の目標

- 関心・意欲・態度：物語の筋や構成を考えながら、よく聞いたり読んだりする。
- 話すこと・聞くこと：人物や描写に注目して、物語を聞くことができる。
物語をよく聞いて、場面を想像することができる。
自分のおすすめの場面を、友達に根拠をもって話すことができる。
- 読むこと：物語をよく聞いたり読んだりして、登場人物の気持ちや情景を読み取る。
- 書くこと：物語をよく聞いたり読んだりして面白いと思った箇所の、根拠をはっきりさせながら書くことができる。
- 言語事項：テキストで使われている言葉の、正しい意味と使い方を知る。

2. 国際学級の実態

国際学級ゆり組では、日本の学校生活や習慣にスムーズに適應できるよう、毎週6時間の個別学習を行っている。内訳は、日本語、漢字、算数がそれぞれ2時間ずつである。この学習を保障するために、教科の学習時間を削っている。音楽・図画工作・家庭・体育・菊の子（総合）は、他クラスと合同で行われるため、国語・社会・算数・理科の学習が時数削減されている。結果、それぞれの学習における内容や活動を精選していく必要に迫られてきた。そこで、国際学級では、学級担任が担当する教科のカリキュラムを作成するように進めてきた。概ねこのカリキュラムに則り、修正を加えながら日々の学習活動を進めてきている。学習で大切にしていることは、「当該学年よりも下の学年の教材も扱いながら、活動は当該学年レベルで行う」ことである。

本学級の実態を併せて鑑みると、6年ゆり組は、4月当初、児童数1名であった。9月に入りようやく2名編入し、現在の人数となった。今後の募集はないため、この仲間で卒業を迎える。

1学期の学習は、対象児童が1名で、カリキュラムに則った学習が全くできなかった。児童の実態について述べる。4月当初より在籍している児童は、4年生の12月に入級した児童である。日本語0からのスタートということもあり、ようやく生活言語を獲得した段階で、今、まさに学習言語を積み上げている段階である。1学期の学習では、社会科の単元「大昔の暮らし」と併せて、国語科で説明文教材『米と麦』（三省堂；3年）を扱った。カリキュラムに合わせた学習が、言葉の壁もあって、非常に困難であったからである。2学期に2名入級してきた。日本語の語彙に課題のある児童であった。両名とも海外在住期間（アメリカ合衆国）が長い児童で、日常会話にも母語である英語がやや混じる現状であった。この3名の実態から見えてきたのは、“文章を読む”学習への手立てのステップを丁寧に行うべきだということである。

そこで、新たな言語としての国語（日本語）を“獲得”する学習活動を模索した。大切にしたことは、「音声言語から話し手の意図や文章の内容を理解させる」ことである。日本人が英語を“獲得”していく際に大切にしている「耳から覚える」「言葉をシャワーのように浴びせる」とことと意図を同じくしている。私が以前に国際学級で受け持った児童のことである。何よりも早く言えるようになったフレーズが、テレビCMの言葉であ

った。また、私自身幼い頃によく見ていたテレビから「耳から覚え」て、自分の住所は言えないのに、NHKの住所は空で言えるようになっていた。「音声」から新たな言語を“獲得”していくのが適切であろうと考えたからである。

本学級の児童の様子を以下に述べる。

A児

タイより第4学年に1月に入級した。入級当初は、日本語が全く分からない状態であったが、現在日本語の日常会話は問題なく行えるようになった。長い漢字仮名交じりの文章は、まだほとんど読めない。漢字の読み書きは、3年生程度である。

B児

アメリカより第6学年の9月に入級した。日本語での日常会話には課題がないが、日本語の文法にまだ慣れておらず、長い文章を書くことに課題がある。日本語での文章読解は、まだ難しい。漢字の読み書きは、4年生程度である。英語検定準1級を取得している。

C児

アメリカより第6学年の9月に入級した。日常会話の中でも、英語が混じり、複雑な表現になると英語中心になる。日本語の聞き取りは既知の語彙であれば、問題なく行える。日本語での文章読解は、まだほとんど行えない。漢字の読み書きは、3年生程度である。

3. 単元について

(1) 音から内容理解へつなげる

現状を踏まえて、国語科としてどのような学習が計画できるか試行錯誤してきた。「音声言語から読解」という視点で、文学的文章教材を扱った。教師の範読や学校図書館司書による読み聞かせも行っている中、より臨場感や雰囲気を感じてもらえるように、文章読解では、プロの朗読を聞かせるようにするのがよりよいと考えた。これまで扱ってきた物語は『100万回生きたねこ(大竹しのぶ)』『泣いた赤おに(中井和哉)』『手袋を買いに(上川隆也)』などである。朗読を通して、お話の雰囲気やイメージをつかみ、文字言語としてのテキストと対照させながら、読解を進めていくように考えた。

(2) 分かりやすい教材

「当該学年よりも下の学年から教材を選択する」という視点で、文学的文章教材や、説明的文章教材を扱ってきている。このことは、当該学年の教科書教材では、語句や漢字の音訓などが壁となって、学習が進まないことが起こりうるからである。そこで、前述の絵本『100万回生きた猫』や『泣いた赤おに』、『手袋を買いに』といったテキストに触れさせるように学習を計画していった。カリキュラムを目安として、実態に合わせて扱う教材を変更しながら進めてきた。

(3) 場面読みではなくまとめ読み

既に述べたように、国際学級では、国語科としての時数が確保できない。そこで、場面の一つ一つを丁寧に読み進めるのではなく、できる限りまとめ読みを進めていくようにしてきた。

本単元の『注文の多い料理店』では、自分の感じた面白さを解説する学習活動が想定さ

れている。ここで言う面白さには、「若い紳士」に象徴される拝金主義を、紙くずのようになった二人の顔だけは…もう元のおりにになりませんでした」と、シニカルに描いている面白さがある。また、言葉や表現の豊かさから面白さを味わうこともできる。「おなかにお入りください」を「お腹にお入りください」と受け取るか「お中にお入りください」と受け取るかのずれに代表される表現のあそびによる面白さである。こうした面白さを10時間から12時間かけて場面ごとに読み進めて、この教材文の構成や表現の工夫を丁寧に押さえた後に、お話を作る創作活動へと学習を展開させていくように教科書が作られている（東京書籍）。しかし、ゆり組の実態からは、本單元には6時間ほどしか時間をかけることができない。そこで、テキスト全体から、友達や家族に紹介していくために、「面白いところ」を探す活動を軸に、まとめ読みを通して、学習を進めていくように計画した。起承転結という文章の構成や細かな表現の工夫などの指導までは行き届かないけれど、お話の雰囲気や面白さにできるだけ浸れるようにした。

4. 単元指導の実際（全6時間扱い）

○主な活動内容	[評価]・教師の働きかけ
<p>1月21日 第1次 1時間目</p> <p>○「注文が多い」から連想する言葉を挙げた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・fancy ・人気がある ・雰囲気がいいお店 ・人気があるシェフがいる <p>○朗読を聞いた 『名作読み聞かせシリーズ01 注文の多い料理店』</p>	<p>・イメージを自由に想像して発言するように促した。 [話・聞]「料理店」と言わなかったが、「注文」という言葉から、きっとレストランだと話し合う姿があった。</p> <p>・ある程度意見が出たところで、「料理店」まで含めて板書した。</p> <p>・「注文の多い料理店」というお話をこれから学習していくことを伝えた。</p> <p>・今井麻美さんの朗読CDを聞かせた。</p> <p>・何もみせず、最後まで聞くように指示した。 [話・聞] 子どもたちは、みな目を閉じて、余計な情報が入らないようにしながら、集中して聞いていた。</p>
<p>聞いて思ったことを書こう</p>	
<p>○お話を聞いて思ったことを書いた。</p> <p>A「クリームを塗ったり、いろいろ取ったりするところが面白かった」</p> <p>B「僕も紳士と同じようになるかもしれない。でも、入る前にお客さんが居ることを確認すると思う。」</p> <p>C「題名が面白い。想像していたお話と違ったのが面白い」</p>	<p>・「おかしなこと」「面白いこと」「不思議なこと」を書くように促した。</p> <p>・原稿用紙に書かせた。</p>
<p>1月24日 2時間目</p> <p>○文字テキストを追いながら、朗読を聞いた</p>	<p>・文字テキストと音声テキストをすりあわせるようにした。</p> <p>・漢字の読み方や難しい語句について、朗読を聞きながらメモをとらせた。</p> <p>[活・聞]「何で気付かないんだろう」「いい加減気付いたらいいのに」とつぶやきながら朗読を聞いていた。</p>

- 意味がとれなかった語句を教わった
 - ・「損害」→「損をすること」
 - ・「瀬戸」→「セラミックのタイル」
- など

- [言] 新出漢字や語句についてふりがなを進んでふっていた。
- ・子どもの予想をいかして、できるだけ分かりやすい言葉に置き換えて教えるようにした。
- [言] 「帯皮」→「gunbelt」など、時折、英語に直しながら理解していた。
- [言] 「下女」→「メイドさん」でも伝わらず、「偉い人の家でお手伝いする人いるじゃん？」という友達の言葉で納得していた。

どんなお話か短くまとめよう

- お話の設定を考えた
- ・秋から冬だけど木の葉がなっているから雪は降っていない。
- ・ガイドも迷っちゃうくらい山奥。
- ・紳士が二人
- ・食べられそうになる話。

1月25日
3時間目

- テキストを音読して、お話の筋を思い出した。

- 初発の感想を思い出し、発表する
- ・題名から想像したお話と違って、面白い。
- ・クリームを塗ったり、いろいろなものを取っていったりするの面白い。
- ・自分が注文をつけられていることになかなか気付かないところが面白い。

- ・「季節」「場所」「中心人物」「どうした」をつなげて文を作るようにした。
- [言] 「二人のわかいしんしが、山奥で道にまよって食べられそうになる冬の話」という言葉に落ち着いた。
- ・音声テキストから文字テキストへと移り変わるころがあるので、丁寧に音読することから始めた。
- ・全文通読では時間がかかりすぎる（25分前後）ので、はじめの場面のみ読むようにした。
- ・初発の感想から「おもしろい」と思ったことを述べて、本時の学習へとつなげるようにした。
- [言] 「おもしろい」という観点が、言葉の面白さなのか、情景の面白さなのか、明確に区別ができていなかった。

お話のおもしろいところをさがそう

- このお話の面白いところに傍線を引く
- ・注文の多い料理店
- ・「おなかにお入りください」
- ・塩をたくさんよもみこんでください
- ・「どうもおかしいぜ」
- ・「うわあ。」がたがたがたがた。
- ・がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。
- ・「ただでごちそうするんだぜ」
- ・こっそり顔にぬるふりをしながら食べました。
- 傍線を引いた面白い箇所を、共有した。
- ・僕は、A君の言ったところが面白くに賛成です。
- ・ようやく気がついたところだから。

- ・「この面白いお話を、他の人たちへ紹介する」ためという、目的意識・相手意識をもたせるようにした。
- ・文字を読み進めることが困難な児童には、前時までに聞いた朗読を思い返ししながら、本文と対照させることで、内容を把握させるようにした。
- ・時間が余っている児童へは、「面白い」理由を考えさせるようにした。
- ・言葉の響きや語感の面白さに偏りすぎないように、場面を想像したり、心情を想像したりしている意見を大きく取り上げるようにした。
- [言] 「語感の面白さ」からなかなか脱却できない児童がいた。できる限りたくさん傍線を引くように促した。

お話のおもしろいところを紹介しよう

- テキストを通読し、改めて感想を話し合った。
- ・イギリスの兵隊ではなくて、みたいな格好をしているってことだったんだね。若い紳士はお金持ちなんだよ。犬のお金を損したとか山鳥を10円ばかりとかお金のことばかり言ってる。
- ・よくよく考えると変だなんて思うけれど、僕が若い紳士だったら、きっとおんなじように気がつかなかったと思うよ。でも、お店に入るときに、他のお客さんが居るかどうかが外から確認すればいいのになと思った。
- ・やっぱり、タイトルの付け方が面白いと思った。
→どうしてかと言うと、このタイトルの「注文」というのが、実は客である若い紳士の注文ではなくて、料理店からの注文を言ってるし、料理店も、料理を出すお店ではなくて、お客さんを料理して食べちゃうお店のことを言ってるから。

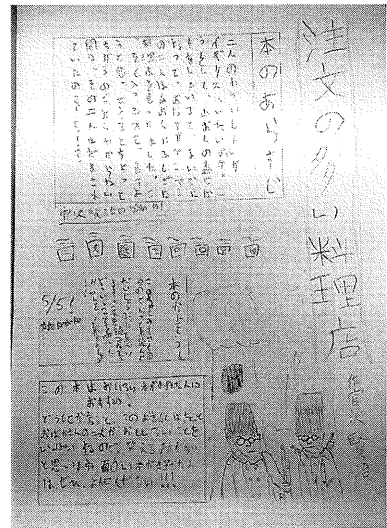
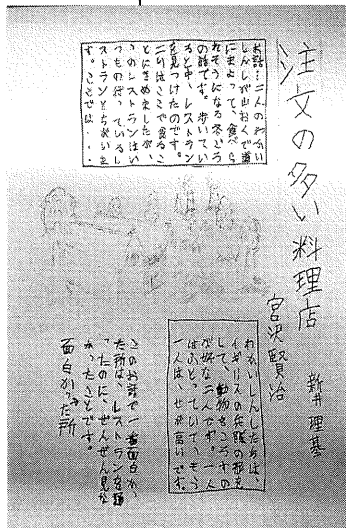
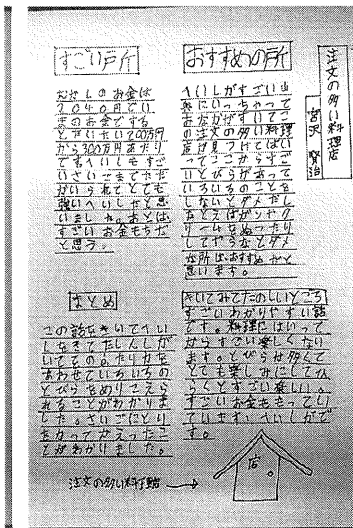
- ・朗読ではなく、自分たちのテキストを最初から最後まで、読ませるようにした。
 - ・漢字や新出語句についても振り返りながら、読み進めるようにした。
 - ・できる限り、理由を詳しく紹介する時間を取るようにした。
- [読] 内容の読み取りまで到達している児童から、お話の面白さを解説される内に、なかなか語感や言葉の面白さから離れられなかった児童が、納得して腑に落ちた表情を見せた。

6時間目

おすすめポスターを作ろう

- みんなで話合った内容を踏まえて、おすすめポスターをつくった。

- ・ゆり組の他の友達に紹介する目的のポスター作りを行った。



- ・面白いポイントを3つ程度紹介して、ポスターにするように促した。
 - ・文字だけでなく、絵や図を使ってもよいことにした。
- [書] 「あらすじ」や「すごいところ」といった小見出しをつすすんでつけながらポスター作りをしていた。
- [書] テキストの挿絵をうまく模写して、雰囲気伝えるようにしていた。

5. 考察（協議会の内容を踏まえて）

（1）成果

国語の教科書教材を読解するための日本語が不十分な児童には、文字を読ませるのではなく、読み聞かせや朗読を聞かせることで、音声を中心に大意把握やあらすじの理解へとつなげていくことが、非常に効果的であった。心情や情景まで読み取れなくとも、言葉の使われ方に気付いて、文字と音とをつなげながら、自身が興味をもったことについて考える取り組みができた。

（2）課題

「面白いところ」という曖昧な表現で学習を進めていったため、「どのような面白さ」なのか、児童がはっきりと認識できていなかった。金額についてこだわっていたA児は、「すごくびっくりしたところ」＝「面白いところ」という認識が最後まで残ってしまった。また、B児は情景を想像しながらも、「自分がレストランに行くとき」との比較に終始してしまって、「普通ではない」＝「面白いところ」という認識であった。C児は、「笑えるところ」＝「面白いところ」であった。「お話の面白いところはどこですか」「面白いなと思ったところはどこですか」と尋ねるときには、しっかりとどのような面白さであるか、カテゴライズしていく必要があった。

「まとめ読み」をするときの難しさとして、表記上の言葉の面白さや表音上の言葉の面白さからなかなか離れられないことがある。物語の筋をきちんと捉えられないと、内容的な面白さまでたどり着かない。一つ一つの場面や言葉にこだわって心情や様子を想像する時間が不足している現状から考えると、「場面読み」に重点をかけた単元と、「まとめ読み」を行う単元とを、バランスよく考えていく必要がある。